
語ることの出来ない剣士

学校嫌い

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

語ることの出来ない剣士

【Zコード】

Z9535Z

【作者名】

学校嫌い

【あらすじ】

突如として起こった魔物の暴走。それにより勃発した「終焉戦争」は、一人の少年から一度全てを奪つた。十年後、成長した少年は「力」を携え故郷を後にする。「スレイジア王国王女・キヤロル」「ド・スレイジア」「虐められる事に快感を感じる少女・メルシア」。道中出会つた一人の少女と共に、ムラクモは「ガルシデア」を巡る旅を始める。基本緩く行きます

第一話・幕開け

その日、数人の子供がここへハイス村へ近辺の草原で遊んでいた。その中の黒髪の少年。名は「ムラクモ・ナイレット」と言つ六歳の少年。

ムラクモは誰にでも分け隔て無く接し常に明るいことから、老若男女問わらず人氣がある。そんなムラクモを両親である「アドルフ」と「ルミナ」も誇りに思つてゐる。

「じゃあ、また明日ー！」

「おお！ 明日は勝つからな！」

「ぼくだって！ 明日も勝つよー！」

ハイス村は取り立てて何かがあるという訳では無いが、毎口子どもたちが元気に遊んでゐる。村の大人達はそれだけで十分だと思つてゐる。

今日もムラクモは友達と追いかけっこや隠れん坊をして遊び、殆どを勝ちで治めた。今のお話はそれについてのことである。

家に戻つたムラクモは元気に「ただいま」と言い、母であるルミナに抱きついた。ルミナは「あらあら」と言いながらムラクモの頭を優しく撫で、「お帰り」と言い、父であるアドルフも「お帰り」と言いながらムラクモの頭を撫でる。

少し荒っぽいが……。

「さ、手を洗つてきなさい？ もうすすぐじさんよ？」

「うん！」

そう元気に返事をして、ムラクモは奥へと小走りで向かい、その背中を、一人は優しい眼差しで見つめていた。

その後、手を洗つて戻ってきたムラクモは、今日あつたことを楽しそうに話し、ルミナに「落ち着きなさい」と言われても尚話し続け、それは夕食の席でも同様だった。両親はその話をしっかりと聞きながら、明日からもムラクモが元気に過ぐせる様にと、それだけを願つていた。

「お父さん、お母さん、お休みなさい」

「ああ、お休み。ゆっくり寝るんだぞ？」

「お休み、ムラクモ。明日も負けるんじゃないわよ？」

「うん」

寝室に入り、布団に入るとムラクモはすぐ夢の中へと旅立った。

「…………」

先程とは打つて変わつて静かになつた家の中で、アドルフとルミナは寄り添い合つていた。

「ムラクモも、もう六歳になるのね……」

静寂を破つたのはルミナであった。アドルフは静かにその言葉に頷く。

「……もの成長って、早いわね……本当に」「そうだな。もう少し成長すれば、力のことを話しても良いかも知れない」

「そうね。あの子なら、きっと正しい使い方が出来るわ」

「ああ。……なあ、ルミナ?」「

「なに?」

「ムラクモが、村を出ると言つたりどつする?」

その問いにルミナは黙り込んでしまつた。

ルミナも、もちろんアドルフもムラクモがずっと村にに止まっていいるいるような子ではないと分かっている。が、やはり子とずっと暮らしたいと言つ思いはある。

「あの子が、それを本当に望むなら、私はその意思を尊重したいわ。あなたもそうよね?」

「……ああ」

もちろん、それはまだまだ先のことだらつ。だが、ルミナの言つ様に子の成長と云つのは早い。

その時はすぐに来るだらつ。

「明日からも、あの子が元気に過ぐせますように」「心配ないさ。何せオレ達の息子なんだからな?」「……ふふ、そうね」

一人は笑い合い、軽い口づけを交わした。

その後、ムラクモを挟む様にして横になり、一人は眠った。

星が煌めく夜空に、一人の少女がいた。後ろには少女に付き従う
ように、赤黒い鱗に包まれた巨体を持つ「ブラッド・ドラゴン」が
静かに羽ばたいている。地上には、ハイス村近辺に棲む魔物。「ラ
ビ」や「ガルム」が群れを成している。

「」

少女は黙言のまま下を見る。

そこにあるのはハイスクール。

少女はおもむろに右手を上げ、一泊おいて振り下ろした。

直後、雷鳴すら生温い程の咆吼が夜空の空気を震わせ、それに続くようにツバキ達も雄叫びを上げた。

その日、ハイスクールはたつた一人の少年を残し、滅びを迎えた。

第一話・幕開け（後書き）

指摘・批判・批評・誤字脱字報告、お待ちしております。

第一話・失った物、そして……（前書き）

ムラクモ一人称です。途中から一人称が変わります。

第一話・失った物、そして……

田の前でお父さんとお母さんが殺された。

次はぼくを殺そうとガルムが襲いかかってきた。

そこからの記憶は無い。

翌朝、気が付いた時に見たのは、荒れ果てた家と、ぼくに手を伸ばして死んでいるお父さんとお母さんだった。
9

喉が引きつるのを感じながら、ぼくは一人に呼びかける。

いや、呼びかけようとした。

「

けれど出来なかつた。

声が出なかつたから。

その後、何度も試しても、ぼくの口から声が出ることは無かつた。

原因は分からぬけど、ぼくは声を出せなくなり、大切な人たちを失つた。

声は出なかつたけど、涙だけは止まることなく流れ続けて……でもお父さんとお母さんをこのままにしておくなんてこともできなくて、ぼくはお母さんの冷たくなつた体を引きずつて家の裏まで行き穴を掘つて埋めた。

次にお父さんの体を引きずつて、お母さんの隣に埋めた。

その時に見た村は、昨日までの村の面影すらない程めちゃくちゃにされていて、至る所に人が転がつていた。

それを見て、また涙があふれてきたぼくは天井がなくなつた家に飛び込み、隅っこで体を丸くした。

それから、何日経ったのか分からない。

さび、じつとしへるとお父さんとお母さんが殺された時のこと
を想い出してしまった。

気がせくと、ぼくは家から飛び出していた。

そのまま走り続けて足を止めた時、ぼくは近くの森にいた。

暴れる心臓が落ち着くのを待つてると、少し遠くに魔物の姿が
見えた。

そいつは、一つの長い耳と黒い毛と赤い目を持つ魔物、ラビだった。

見てみると、そいつもぼくに気付いたようだ、ぼくを食べようと
でも思っているのか、四本の足を使つて走ってきた。

「...」

声を出せずに叫び、ぼくもラビに向かつて走った。

ただがむしゃらに殴つて、体中至る所を噛みつかれたりして、服
もボロボロになつたけど、それでも手は止めなかつた。

止めたらい、そこまで終わつてしまつ『氣』がしたから。

仰向けに倒れて、鉛色の空を見上げる。

結果で言えば、ぼくは負けなかつた。

でも、勝手もいなかつた。

戦つている途中で、ラビの方が諦めたのか帰つて行つたから。

この状態で、また魔物が来たら今度こそ死んでしまつ。

そう思つて、無理矢理体を起こしてぼくは村へと戻つて、家に入つた途端意識を失つた。

翌朝、お父さんとお母さんが殺された時の夢を見て田が覚めた。

「…………」

また涙があふれてきて、ぼくは、今度は自分の意思で森を田指して走つた。

ラビを見つけて突撃し、無我夢中で拳を振るつた。

体を動かしてさえいれば、一人のことを思い出さないから。

夢中で体を動かし続けた。

今度も勝ちも負けもしなかつた。

家に戻つてまた眠る。

翌朝、今度は空腹で目が覚めた。

そういうえば、ここ数日は何も飲み食いしていなかつたことを思い出し、空腹であることを自覚すると、お腹の音が止まなくなつた。

でも、もちろん食料なんて家にはない。

あつたとしても、とっくに腐つていると思つ。

でもここハイス村は、いつか「ききん」というものが訪れた時に備えて、毎年食料を少しずつ村の倉庫に保管していたから、もしかしたら少しくらいには食べられるものが残つているかも知れない。

奥にある倉庫に向かう途中、友達を見つけたけど、もちろん死んでいた。

他の人たちも同じ様に。

破壊された倉庫の破片などを避けながら中に入り、見てみると思つた通り殆どがぐちゃぐちゃに潰れていて、とても食べられる状態じゃなかつた。

その中を漁り、なんとか食べられるものを探し出し、少しだけ食べてあとは家に持つて帰つた。

これからは、できるだけ少ない食料で毎日を過ぐることになとい。

「ほんを食べて、また森に向かいぼくはラビと戦つた。

相変わらず勝つことはなかつたけど、一日前に比べればだいぶマシにはなつた。

お腹を叩けば動きを鈍らせることができるので分かつた。

その後、また家に戻つて眠つた。

それからは、一日一回朝ごはんを食べただけで、後は戦つて眠るを繰り返して生活した。

服がもつ着ることができなくなつてしまつたから、落ちていた布を適当に巻き付けた。

戦っている内に、傷の治りが早いことに気付いた。

最初は、ただ夢中だったから気が付かなかつたのかも知れない。

ラビに噛まれた程度の傷なら、眠っている間にぜんぶ治つていて、偶に大きな怪我を負つても丸一日眠つていれば完治した。

でも、戦うなら都合の良い体であることは事実だから、特に気にせず戦い続けた。

約一年が経ち、ラビなら勝てる様になつた。

お父さんが使つていた短剣を持ち、今度は灰色の毛を持つ魔物、「ガルム」と戦つてみようと思い、一体で行動しているガルムを探して森の中を歩き、見つけた所で周りに仲間がいないかどうかを確認して攻撃を仕掛けた。

ラビとは全く違う動きをするガルムに、最初はどちらも勝つことはできなくて、何度も逃げた。

途中、仲間やラビが来ることもあって本当に危ない時もあった。

それでも、戦うことは止めなかつた。

一人のことを思い出して涙を流すことは無くなつたけど、やつぱり思い出すのは辛いから……体を動かし続けた。

更に二年が経過した頃には、ラビはもちろんガルムにも負けなくなり、とっくに尽きた食糧を補つためなんとか食べられる様にして食べた。

最初は食べるのが辛かったけど、食べる内になれて、今は普通に食べることができる様になった。

骨を適当な所に埋めて、それに向けて合掌し、今日もオレは森へと向かつた。

「グゥウウウウ……」

田の前で四体のガルムが威嚇している。

木を削つて作った自前の木刀を構えて、オレも戦闘態勢を整えると、ガルムが一斉に飛び掛ってきた。

上体を捻つたり木刀で防いだりして捌き、一体を木刀で叩き、一体を殴つて地面に叩きつける。

残っている二体に、踏み込んで一気に接近し横風に一閃して吹つ飛ばすと後の木に叩きつけられ、地面に転がった。

木刀を逆手に持ち背中側に振るとガルムの鳴き声が聞こえ、次いで倒れる音が聞こえた。

最初に殴ったガルムが攻撃を仕掛けってきた訳だ。

四体全てを戦闘不能にすると、茂みから一斉に仲間が飛び出してきた。

保険をかけていたらしく、十以上はいる。

改めて戦闘態勢を取り、ガルムに備える

そして、一瞬の静寂の後聞こえたのはガルムの吠える吠えではなく、かと言つてもちろんオレの声でもない。

グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！－！

森全体どころか、大陸全土に響きそうな、正しく天を衝くような咆吼だった。

それを聞き、ガルムたちは仲間を置き去りにして一目散に逃げ出した。

大きな翼が羽ばたいている音が聞こえて上空を見ると、巨大な影が差し、辺り一帯の木々を潰しながら、数メートル先に巨大な四肢を支えとして降り立つた。

そいつは、赤黒い鱗に包まれた巨大な体と、同じく巨大な翼を持つ、本来この「スレイジア大陸」にはいない筈の「ブラッド・ドラゴン」だった。

ブラッド・ドラゴンは周辺を見渡し倒れているガルムを見つけると、その大きな口を開き躊躇することなく開きかぶりついた。

ガルムの鳴き声と同時に血が噴き出し地面を汚す。

勝てる訳がないことは分かつていた、けれど逃げることができなかつた。

ラビやガルムなんかとは比べるのはおこがましい程の圧倒的な威圧感が、オレの体から自由を奪つていた。

どれだけ動かそうと思つても、足は竦みきつてしまい指一本すら動かすことができない。

何も考えられずにいると、田の前に迫つたブラッド・ドラゴンが口を開き、闇が広がつた。

親父とお袋、友達、村の人たちの顔。

それらが、次々と浮かんでは消えていった。

死ぬのか？

こんな所で、何も出来ないまま

オレは死ぬのか？

そんなのはご免だ！

瞬間、ブラッド・ドリゴンの動きが止まり、おかしな動きを始めた。

いや、可笑しいこといつよつ、「あり得ない」と呟いた方が正しいか？

首の位置がずれている？

そんな感じだった。

そのことに疑問を抱いていると、何かがブラッド・ドリゴンの体を斬り裂いた。

そして、呆氣なく崩れ去つた「ブリッヂ・ドラゴン」は何か黒い物に呑み込まれ、肉片一つ残さずその場から消え、後にはなぎ倒された木々と、ブリッヂ・ドラゴンの血が残つた。

黒い何かは、ゆっくりとオレに向かつてきて、今度こそオレは終わると思い田を開じた。

だが、どれだけ待つても何の衝撃も来ず、オレはそつと田を開けた。

田に映つたのは、黒い何かがまるでオレのことを心配でもしているかのように、田の前を忙しなく右往左往していくところ……どう説明すれば良いのかよく分からぬ状況だった。

第一話・失った物、そして……（後書き）

指摘・批判・批評・誤字脱字報告、お待ちしております。

第三話・受け継いだ物（前書き）

今回でプロローグは終わりです。次回からは三人称で進めていきます。

第三話・受け継いだ物

何もしてくる気配はないので、まずは様子を見ようと思いつつ下がった。のだが、黒い何かはあるで、「離れないでくれ」と言わんばかりにぴったりとくっついてきて、胸に頭?を擦りつけてきた。

子が外出しようとする親にくつついで、「行かないでくれ」とせがんでいる様な物だと考えればわかりやすいか……?

まあ、よく分からぬが……敵じゃないのかも知れない。

それなら、オレとしては助かる。ブラッド・ドライコンをあんな簡単に斬り裂く奴が相手では、オレなど紙を斬る様に斬られてしまう。と、考へている間も、黒いのはオレにぴったりくっついていた。

お前はオレの敵なのか?

「一」

いきなり黒いのが、ぶんぶんと勢いよく体?を振った。オレが思つたことを否定しているかの様なタイミングの良さに驚き、今度は別のことと思つてみる。

オレの味方か？

そうすると、今度は大げさな程体を上下させた。

その後もとりあえず思いつくことを思つてみると、全てに上下に振るか左右に振るか分からないと言う様に傾げる様な動作をし、こいつが、「オレの思つてることが分かる」ということが分かった。

さつきの「ラッシュ・ドライビング」がまだいると思つてゐるのか、あたりに魔物の気配は全くと言つて良いほど無い。

安心して黒いのと会話、の様な物が出来た。

暫くそうして過ぎした後、家に帰ることにして森を出口へと向けて歩く。

その間も、黒いのはオレから離れず、寝る時も離れることが無かつた。

翌朝、田を覚ますと黒いのはになくなっていた。

「…………」

寂しこと……また田にきて欲しこと……やがて、思った。

「一」

思つた途端、足下から黒いのが田にきてオレに飛びついた。
訳も分からずにこうると、黒いのがオレの手を引き立ち上がりせ田
の前で動きを止めた。

まるで、オレから何か言ひのを待つてゐるかの様だ。

だから、オレは思いで伝えた。

よろしくな?

黒いのは、また何度も頷いた。

それから六年。

俺は十六歳になった。

成長した俺がしたことは、村を綺麗にすることだった。村人たちは、もう既にみんな骨になってしまっているが、そのまま放置しておいては決して報われることはないだろう。

埋葬することで、少しでも安らぐことが出来るのなら……そう思い、家族ごとに近くに埋葬した。それから、家の残骸なんかをノアへに呑み込んで貰い片付けた。

ノアと書つのは、黒い奴に俺がつけた名前だ。

ノアは、六年前ブラッド・ドラゴンに襲われそうになつた時に現れた俺の力で、それ以来俺の相棒だ。聞いてみた所、十年前俺だけが生き残つたのも、ノアが守つてくれたかららしい。

あの時意識が途切れたのは、その時の俺ではノアの力に耐えられなかつたからだと思っている。ブラッド・ドラゴンの時は、ハッキリと意識があつたからな……。

ノアは俺の思いを感じ取り、それによつて形を変える。あの時、ブラッド・ドラゴンを斬り刻んだのは、俺に「死にたくない」と言つ思いを、敵を倒すことと形に表した結果なのだろう。

それと、刀や槍、槌や弓矢など、色々な武器の形にもなれるから、戦闘の幅も広がり、場所に応じた戦い方が出来る。

弓矢に至つては、矢が切れる心配が無いからかなり使い勝手が良い。

まあ、俺は専ら刀だが……槍や槌も試してはみたが、親父から受け継いだのか刀の形が一番なんじんだ。だから戦う時は、すぐに刀として出てくる様にノアにも頼んでいる。

少し脱線したか……。

とりあえず、普段の状態のノアは質量などに何の関係も無く呑み込むことが出来る。聞いてみた所、限界は無いと言つから大した物だと思う。実際目の前でブラッド・ドラゴンが全て呑み込まれたのを見た俺としては、疑うことなど最初から無い訳だ。

現に今も、言い方は悪いが、ただの木と化した家の残骸をどんどん呑み込んで……見ている内に全部呑み込み終わった。一体呑み込まれた物はどこに行っているのだろうか?と気にはなるが、なんとなく怖い気もするので聞いていない。

もし、見せてやると言つ意味で俺まで呑み込まれたりビツなるか

……。

最後に自分の家の片付けを始めた。

と言つても、十年間使っていた家だからな……そこまで散らかってはいない。少し整理するだけで終わりにしようと思い、細かい塵や埃をノアを簣の形にして掃いて、それだけで終わりにした。

が、ノアが家の床を見てずっと動かなかつた。

ノア？

呼びかけても返事をしない。こんなことは今まで無かつたから、俺も気になりノアが見ている一点を見る。

ノア！

一瞬にして槌に変わったノアを振りかぶつて床に叩きつけると、床を碎いたとは思えない、鋼を叩いた様なガキン！という音が響いた

そして出てきたのは、少し大きな木箱だつた。

それだけなら、「なぜ、こんな物があるのか？」という単なる疑問だけで終わつていただろうが、それ以上に俺は　俺とノアは驚きを隠せなかつた。

ブラッド・ドラゴンすら簡単に斬り伏せたノアの攻撃をいとも簡単にはじき返したのだから、「驚くな」という方が無理だ。

なんとか平常心を保ち、いつもの状態に戻つたノアにははじき返されても大丈夫な様に後ろで支えてもらい、俺はそつと木箱に手を

伸ばした。

だが、警戒していたのは裏腹に俺の手は難無く木箱に届いた。

両手でゆっくりと箱を開け中を見ると、そこには綺麗に置かれた一着の服と、その上に赤く輝く宝石が填め込まれたペンダントがあった。ペンダントを取り、次に服を取る。すると、その下に二つに置かれた紙が置いてあつた。

服とペンダントを下に置いて紙を取り、開く。

『我等が最愛の息子であるムラクモへ

お前がこの手紙を読んでいると言つことは、オレは今母さんに怒られているのか、それとも、オレもルミナも死んだのか……そのどちらかかも知れないな。まあ、どちらにせよ、お前ももう十六歳になつたということか、めでたいことだな。

さて、本題に入ろう。

力のこととは既に知っているな？　その力はルミナからお前に受け継がれたモノだ。詳しいことは、使っていく過程で覚えてくれ。そろそろ母さんに変わる』

そこで、字は親父のモノからお袋のモノに変わった。

『愛しのムラクモへ

力のことは、お父さんが書いたとおりよ。どうしてか分からないけど、私はその力を生まれた時から持っていたの。それで何かがあつたって言う訳じゃ無いんだけど、一つだけ伝えておくわ。

力の使い方をどうか誤らないで。

私が力について伝えたいのはそれだけよ。

さて、手紙を読んでいるなら、箱に入っていた服とペンダントも見てるわよね？ その服は、昔お父さんが使っていた物よ？ 見た目は只の着物と変わらないけど、物理攻撃や魔法に対する防御力はかなりの物だから、安心して良いわよ？

ペンダントは、私からの贈り物。

装備者の魔力を増幅させる力と、ある程度の魔法ならばじき返す力があるわ。

この二つがあれば何も問題ないわ！ さあー、自分の目で見て、自分の手で触れて、自分の足で世界を回ってきなさい！ 村とは比べものにならないドキドキが貴方を待ってるわよ！

あ、それと、大事な人が出来たら連れてきてね？ 楽しみにしてるから『

手紙はそこで終わった。

とりあえず、思ったのは……「お袋ってこんな性格だつたっけ？」
ということだ。それと、紙面とは言え、いつも急に変わられると呼
んでる側としては少し戸惑う。

もしかしなくてもこいつちが「素」なんだろうか？

黒い着物を着て、ペンダントを首から提げ、少し髪が邪魔だつた
から、首の辺りで束ねた。

準備を整えた俺は家の裏に回り、親父とお袋が眠つている場所に
向けて手を合わせた。

『行つてきまۏす』

口だけを動かし、心の中でそつ言つて、俺は外に向けてノアと共に歩き出した。

村の出入口を出て、振り返り見たのは、家なんて一つも無いと
ても「村」とは言えない状態のハイスクール。

十六年間過ごしたこの村に、思い入れが無い訳などなく、名残惜しい気持ちが胸に広がる。

そんな俺の気持ちを察してか、ノアがすり寄ってきた。

大丈夫だと、そう思いを込めながら撫でると、安心したのかそつと離れ、自分から消えた。

俺の意思に反応して出てくれる「」が殆どだが、偶にいつやって自分で消えたり出てきたりする。

「.....」

さて、出発するとしようか。

何が起ころかなんて分からぬが、それでこそ旅つてのは楽しい物だろう。

面白い奴にも会えるかも知れないしな。

第三話・受け継いだ物（後書き）

指摘・批判・批評・誤字脱字報告、お待ちしております。

次はムラクモのプロフィールと世界の事を少し載せます。興味が無ければ飛ばしてくれて構いません。

主人公・世界観紹介（前書き）

必要無いとは思いますが一応載せておきます。

主人公・世界観紹介

名前：ムラクモ・ナイレット 男 十六歳

属性：闇

身長：178?

体重：67?

利き腕：左

正確：温厚。

切れると怖い

……具体的に言つと、終始笑顔を浮かべて相手に直に怒氣やらをぶつける。

スレイジア大陸北端にあるハイス村に住む極々一般的な少年だったが、突如魔物の襲撃を受け両親と村の仲間を失う。原因は分からぬが、その時に声も失つてしまつた。それから四年間は一人で魔物と闘いながら生活し、本来はスレイジア大陸にはいない筈のブランド・ドラゴンに襲われそうになつた際、力が目覚め退ける。

我流で戦い続けた為、気配を隠す手段や探る手段に長けている。

それ以来は、その力にノアと名をつけ共に六年間生活し、十六歳になつたある日、両親から譲り受けた着物とペンダントを装備し村を出た。

ノアを刀の形に変形させ戦う。

ノア

ルミナから受け継がれたムラクモの持つ力。主の思念に反応して形を変える。

世界名：ガルシテア

「ライドメイル家」が治める「ライドメイル大陸」

「マクトウェイ家」が治める「マクトウェイ大陸」

「イノセイド家」が治める「イノセイド大陸」

「ファイゼン家」が治める「ファイゼン大陸」

「スレイジア家」が治める「スレイジア大陸」の五つの大陸から成り立っている。これら五つはそれぞれが「世界貴族」と呼ばれており、力の強い所から大きな大陸を治めている。

見て分かる通り、「スレイジア家」は五つの中で最下位に属している。

中央にある最も規模の大きな「ライドメイル大陸」を東西南北から囲むように他四つの大陸がある。

本来「ブラッド・ドラゴン」等の龍種は「ライドメイル大陸」に多く棲息している。

「終焉戦争」

十年前、世界各地で魔物が原因不明の暴走を起こし、それにより勃発した人と魔物の戦争。

波の様に押し寄せる魔物達の軍勢が、世界を飲み込むように見えた事からそう名付けられた。

＜属性＞

火・水・風・地・氷・雷・光・闇の八つの属性が存在し、一人一つが基本となっている。確かめるには体内のマナを指先に集める、又は手のひらの上に出現させる方法があり、その色によつて判断される。

火は赤。

水は青と言つた具合。

だからムラクモは黒。

補足説明 マナの色と髪・目の色は一切関係ない。

水で赤い髪の人もいるし、火で青い髪の人もいる。

ムラクモは単に偶然一致しただけ。

主人公・世界観紹介（後書き）

こんな感じです。

出ないよう努めますが、以降矛盾点などを見つけた時は遠慮無く報告してください。

第四話・キャロル＝ド＝スレイジア

ムラクモが旅に出たその日の深夜、スレイジア王国付近にある「始まりの森」に一人の少女がいた。

実は今、ムラクモもこの森にいるのだが、両者とも互いの存在には気が付いていない。

「はあ、はあ…………」「ここまで、来れば、大丈夫かしら？」

「」の少女の名は「キャロル＝ド＝スレイジア」。

スレイジア王国王女、十四歳である。

まだ幼さの残る、けれども端正な顔立ち。

流れる様に腰元まで届いている銀色の髪は月光を受けてキラキラと光を放ち、蒼い右目は冷たい印象など伝えることなく、逆に暖かい印象を抱かせる。

そして、何より見る者が注目するのは、その「黒い左目」だろう。

これには少し事情があるのだが、それは追々説明するとして。

そして腰にはスレイジア家の家宝である「玉刀・シュヴァイス」を提げている。

鞘、柄から刀身　　その全てが白で統一されている。

「それにしても……やけに警備が薄かつたけど、どうしてなんだろう？」

現在キャロルが疑問に思つてることは、城を抜け出すさいの警備の薄さである。

本来ならば、深夜とはいへ、城に仕える騎士団が交代制で警備を行つているが、キャロルの自室付近には人っ子一人いなかつたのだ。陽の高い内に準備を整えていたキャロルは、まずは部屋の番をしている一人の騎士をどのようにして撤こうかを考えていたのだが、結局良い案が浮かばずに夜を迎えた。

だが、いざ外に出でみるとそこには番の二人どころか他の騎士すらいなかつた。

「もしかして……王さ……お父様達には気付かれた？　でも、それなら追つ手が来るはずだし……」「うん……」

キャロルの中では、「気付いているなら警備を厚くする筈」という考えが浮かんでおり、ある種の矛盾点を見つけたことで余計に頭を抱えてしまつていた。

実際はキャロルの考え方通り、王も王妃も娘がここ数日の内に城を抜け出すことを知つていた。

キャロルが外の世界に人一倍思いを馳せていたこと両親だけでなく城に仕える者全員が知つていており、皆その願いを叶えて

あげたいと強く思っていた。

そのことを知るのは当分は先のことであるが……。

「考へても仕方ないか。今は氣付かれないだけで、明日になつたら追つ手が出されるだらうし…… とりあえず進もう」

考えを切り替え、キャロルは森を進み始めた。

と言つても、現在の時刻は既に前述した通り既に深夜を回つている。

少し進んだところでキャロルは腰に付けている小さなバッグから人一人ならすっぽり包み込める程の大きさを持つ布を取り出した。

このバッグは限界こそあるが、その限界に至るまでならどれだけ大きな物でも収納することが出来るといつ便利な物だ。

キャロルが取り出した布は、^くグリッサ^くという、火属性の魔物の毛皮から出来ており、毛皮そのものが熱を帯びてるので夜や寒い地方では重宝されている。

「ここの辺りでいいかな？ 魔物も、思つてた程いないし」

魔物がないその理由 キャロルがムラクモの様に気配を探る術に長けていたならすぐに分かつただろうが、これまで十四年間、キャロルは魔物との戦闘を行つたことがない。

今までは、騎士団の訓練を近くで見ながら我流で剣術の腕を磨き、十一歳になつた時から団員の中に混じり実戦訓練も行つていたが、やはり相手が王女となつては手加減抜きで戦つと言つのは憚られる

そういうした騎士が殆どだった。

本人がいくら「手加減しないでください」と頼んでも、やはりどこかで手を抜いてしまうのは仕方がないことであろう。

そういうた理由で、キャロルはまだ本気の戦いと言つのを経験したことがない。

だが、剣術の腕は騎士団員にも負けでいない　いや、間違いなく騎士団よりも強いだろつ。

それほどキャロルの剣の才覚には目を見張る物があった。

（森を抜けたら、道なりに進んで「レークナ」に行つて、ギルドに登録して……その後のこと……それから考えればいいか）

眠い頭ではそれ以上考えることが出来ず、キャロルは眠りについた。

ギルドと言つのは、それぞれの街にある施設であり、魔物の討伐や薬草の採取などを行い、報酬を得る場であると同時に、酒場の機能も果たしている。

もし、この考えを両親含め城の者が聞いていたなら、全員が止め

に入つていただろう。

まだ十四歳の少女をそんな所に送り出すのは親でなくとも心配する。

それほど、スレイジア家が国民から受ける信頼が厚いということでもあるのだが。

翌日、目が覚めたキャロルは水筒の水を顔にかけて残っていた眠気を飛ばし、そこで大きな力を感じたのだが、一瞬だつたため氣の所為と片付けた。

荷物を片付け、出発しようとしたキャロルはそこで、はたと自分が王女だと気付いた。

おかしな表現だが、彼女に取つて自分が王女だといつゝとは当たり前ではない。

事情はあるが、それも追々説明するとしよう。

とにかくにも、自分が王女だと気付いたキャロルは、自身に姿を変える魔法をかけた。

銀色の髪は深紅に変わり、両耳も同じ紅に変え、自分の髪を一房つかんで魔法がかかっていることを確認した所で奥へ向けて出発した。

途中、キャロルはいくらなんでも魔物が少なすぎることに疑問を

感じていた。

(「ここまで一回も魔物に遭遇しないなんて……どうなってるのかしら?」)

出発して数時間、そろそろ中心部に到達すると、一度も魔物はキャロルの前に姿を現さなかつた。

(実戦を一度も経験出来ないのは……先のことを考えると不安なんだけど、魔物を呼ぶ魔法なんてないし……)

恐らく一般的な十四歳の少女なら、魔物を呼ぶ魔法云々を考えることは無いだろうが、育った環境が違うのだから仕方ないと言えば仕方ないのだわ。

そして、これから起じる」とはある意味ではキャロルに取つて幸運である。

ギヤオオオオオオオオ!

「ツー　なに!?

突然聞こえた咆吼に驚き、キャロルは辺りを警戒した。

次いで聞こえてきたのは大きな地響きと、木々が倒れていく音。

そして見えたのは

「な……何で、龍種がこんな所にいるのよ」

自身の数十倍はあるうかと言ひ口体を持つ青いドラゴン、
「ワイバー」である。

初めて遭遇した魔物が龍種であることにキャロルは戸惑ってしまった
い、なぜスレイジア大陸に龍種がいるのかと言つ疑問を考える暇も
無く、只ワイバーを目の前にして動けなくなるだけであった。

そして、そんなキャロルをワイバーがみすみす見逃す訳も無く、
低い唸り声を上げた直後その口から炎を吹き付けた。

「しまつ
」

やつと体を動かそうと思つた時には既に遅く、炎は眼前まで迫つ
ており、キャロルは恐怖のあまり目を閉じてしまった。

そんなキャロルを突如現れた一人の人物が炎の届く寸前の所で救
出した。

同時に足下から黒い靄の様な物が出現し、ワイバーに向かつて
いつたかと思うと一瞬にしてその体を斬り刻み、全てを呑み込んだ。

突然の浮遊感に襲われたキャロルは何が起こったのか、と思い目
を開けた。

そして、キヤロルを助け出した人物もワイバーンが呑み込まれたことを確認し、自分が助け出した少女の身に何も起こっていないか確かめようと視線を下に降ろした。

そうなると当然二人の視線は交錯し、見合ひ形となる。

「…………」

「…………」

少しの間両者とも無言となつた。

(真っ黒な髪……綺麗だなあ……どんなお手入れしてるんだろう?
それに見た目は細いけど、体つきもがっしりしてるし、有名な冒
険者だつたりするのかな?)

キヤロルがそんなことを考えてる間に、黒い靄の様な物も役目を終えたと言わんばかりに青年の足下に戻つていきやがて消えた。

その後、青年はキヤロルをそつと地面に降ろした。

「(もう少し抱っこして欲しかったかも……)えっと……助け
てくれて、ありがとう」

ワイバーンはどこに行つたのか?

今の黒いのは何なのか?

疑問があるにはあつたが、キヤロルはまづはお礼を言つべきだと思いそう言った。

キャロルの言葉に、青年は笑いながら「構わない」と呟つ様に首を横に振り、その様子を見たキャロルは名を名乗りることにした。

「貴方、名前は？　わたしは、キャ　」

そこでキャロルはまた自分が王族だと気付く、名乗りを不自然なところで止めてしまった。

「？」

青年の方もいきなり途切れた少女の言葉に、ビックリしたのかと首を傾けるが、当のキャロルはそのことに気付いておらず、

(ビックリ？　仮にもわたしは王女だし、本名を言つたら、いくら姿を変えてるって言つても、この人もわたしのこと気に付くよね？　うあ～……えつと…………あ、そうだ！　別の名前を名乗れば良いんだ！　えつと、キャロル＝ド＝スレイジアだから……………「キャシー」！　うん！　キャシーにしてやー！)

と、こうことを考えていた。

本人は気付いていないが、考へている最中頭を抱えたり呻き声を上げたり、体を捻つたりと実に様々な動きをしていた為、青年のキャロルに対する第一印象は「面白い奴」と言つ物になつていては、当然と言えば当然だらう。

「『』みんなさいね？　わたしは『キャシー』。貴方の名前は？

「…………」

キャロルの聞こえに、青年は無言で返した。

一瞬、聞こえていないのかと思ったキャロルであったが、この距離で、しかも周りの音が一切していない状況で聞こえていないといふのはあり得ないだろ？！という結論に至り、実際青年にはちゃんと聞こえていた。

「ねえ、ちゃんと聞こてる？」

青年は聞こえてないと呟つ意味を込めて頷いた。

だが、やつするとキャロルから「じゃあ、答えて」と返ってくるのは当たり前だ。

青年せどりしづか困つてしまい、導き出した答えが、

「あー！ やよっと、どこ行くのよー。」

その場から退散することだった。

走つて森を進み、出口へと近づいていく青年をキャロルも負けじと追いかける。

途中、ついわざとまで全く出でこなかつた魔物達が出てくふうになつたが、今のキャロルにそんなことを気にする余裕は無く、構わずに青年を追い続けた。

当の青年にももちろん魔物は襲いかかっているが、青年は黒い刀を用いて一刀の下に斬り捨てていく。

走りながら、キャロルはその剣筋に見惚れるとこう器用なことを

行つておつ、同時にビリから刀を出したのかと言つ疑問も抱いていた。

「刀所か荷物を入れる物すら持つてないのに……どうなつてゐの?
それに、服も見たことない物だし」

青年が来ている服はキャロルの様に上と下で分かれている物では無く、一枚の布で作られており、腰に巻いている大きな帯で止めているといつ……キャロルにとつては不思議でならない衣装としてその用に[写]つてゐる。

ドレスなどを見たことが無いキャロルでは無いが、見たことの無い型をしていてる為そつ[写]つてゐる。

疑問を抱きながらも、木の枝などはしっかりと避けながら青年を追いかけ、夢中になつていていたからか、すぐに出口へと辿り着いた。

先に抜けていた青年は流石に疲れたのか少し先で息を整えていた。

「はあ……はあ……やつと、追いついた」

もちろんその青年を追いかけていたキャロルも疲れている、が、ここで逃がすと次も追いかける自身は無い為、小走りで駆け寄り青年の前に出た。

「どうしていきなり走り出したのかは分からないけど……名前くらい教えてくれてもいいんじゃない?」

「…………」

それでも青年は口を開かない。

代わりに出てきたのは、あの黒い靄だった。

「一。」

何か来ると思ったキャロルはシュヴァイスを抜き構え、それを見た青年は素直に感心していた。

隙が無いからである。

だからいつでも腕も達者とは限らないが。

「何をするつもり?」

「……」

相変わらず青年は答えず、またも代わりに黒い靄が動いた。

地面に伸びたそれは土を削り何かを書いていく。

「？」

自分に危害を加えるつもりはない」と、なんとなくだが分かったキャロルは構えを解き、けれどショヴァイスは握ったままでそれを眺め、最後にジャリ、と音を立てて黒い靄は地面から離れ、その文字をキャロルは田で追つた。

「？ これ、なんて書いてあるの？」

しかし、読むことができなかつた。

「？」

首を傾げた青年は、自分もその文字を読み、自分視点で書いていることに気付きキャラトルを手招きました。

それに従い、青年の横に並んだキャラトルは、青年から文字列を指されもう一度眺め、その文字が青年から見た方で書かれていたことに気付き、その文字を声に出して読んだ。

そこにまじう書かれていた。

「『俺の名前は、ムラクモ・ナイレット』」

と。

第四話・キャロル＝ド＝スレイジア（後書き）

指摘・批判・批評・誤字脱字報告、お待ちしております。

次回からキャロルはキャシーと統一します。

偶にキャロルになるかも知れませんが、殆どの場合はキャシーと表記します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9535z/>

語ることの出来ない剣士

2012年1月1日21時19分発行